

3. ミニトマト

・殺菌剤

| FRAC コード | 薬剤名 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 備考 |
|-------------|------------------------------------|-----------------------|----------------|--------------------------------|---------------|
| M1 | (銅水和剤) I Cボルドー 6 6 D | 散布 | 発病前～発病初期 | - | |
| | Zボルドー | 散布 | - | - | |
| | クプロシールド | 散布 | 発病前～発病初期 | - | |
| | ドイツボルドーA | 散布 | - | - | |
| - | (ダゾメット) ガスタード微粒剤 バスアミド微粒剤 | 本剤の所定量を均一に散布して土壌と混和する | は種又は定植 21 日前まで | 1 回 | |
| 24+M1 | (カスガマイシン・銅) カスミンボルドー 銅シン水水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 5 回以内 | |
| - | (クロルピクリン) クロピクテープ | 土壌くん蒸 | - | 2 回以内 (但し、床土は 1 回以内、圃場は 1 回以内) | |
| | クロールピクリン | 土壌くん蒸 | - | 2 回以内 (但し、床土は 1 回以内、圃場は 1 回以内) | |
| M5 | ダコニール 1 0 0 0 | 散布 | 収穫前日まで | 2 回以内 | |
| 1 | トップジンM水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 5 回以内 | チオファネートメチルを含む |
| M7 | ベルコート水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 2 回以内 | |
| NC | マスタピース水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | - | |
| 2 | ロブラールくん煙剤 | くん煙 | 収穫前日まで | 3 回以内 | |

・殺菌剤 (参考農薬)

| FRAC コード | 薬剤名 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 備考 |
|-------------|--------------------|------|--------|-------|-----|
| M1 | (銅水和剤) ドイツボルドーA | 散布 | - | - | |
| 11+7 | シグナムWDG | 散布 | 収穫前日まで | 2回以内 | |
| NC | ハーモメイト水溶剤 | 散布 | 収穫前日まで | - | 野菜類 |
| M7 | ベルコート水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 2 回以内 | |

・殺虫剤

| IRAC コード | 薬剤名 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 備考 |
|-------------|--------------------------------|----------|------------------|-------|-----------------------|
| 4 | アドマイヤー 1 粒剤 | 植穴土壌混和 | 定植時 | 1 回 | |
| 6 | アフーム乳剤 | 散布 | 収穫前日まで | 5 回以内 | |
| 4 | (ジノテフラン) アルバリン粒剤 スタークル粒剤 | 植穴土壌混和 | 定植時 | 1 回 | |
| - | エンストリップ | 放飼 | 発生初期 | - | 野菜類 (施設栽培) |
| - | オレート液剤 | 散布 | 発生初期～ 収穫前日まで | - | 野菜類 (いちごを除く) |
| 15 | カスケード乳剤 | 散布 | 収穫前日まで | 2 回以内 | |
| 13 | コテツフロアブル | 散布 | 収穫前日まで | 3 回以内 | |
| - | サンクリスタル乳剤 | 散布 | 収穫前日まで | - | |
| 11 | ゼンターリ顆粒水和剤 | 散布 | 発生初期 (但し、収穫前日まで) | - | 野菜類 (キャベツ、はくさいを除く) |
| 4 | ダントツ粒剤 | 植穴処理土壌混和 | 定植時 | 1 回 | |
| 9 | チェス顆粒水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 3 回以内 | |
| 5 | ディアナSC | 散布 | 収穫前日まで | 2 回以内 | |
| 11 | トアローフロアブルCT | 散布 | 発生初期 (但し、収穫前日まで) | - | 野菜類 |
| 28 | フェニックス顆粒水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 2 回以内 | |

| IRAC コード | 薬剤名 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 備考 |
|-------------|------------|-------------|---------|------|--------------------------------|
| - | プリファード水和剤 | 散布 | 発生初期 | - | 野菜類 (施設栽培 ただしいち ごを除く) |
| UN | プレオフロアブル | 散布 | 収穫前日まで | 2回以内 | |
| 28 | プレバソフロアブル5 | 散布 | 収穫前日まで | 3回以内 | |
| 28 | ベネビアOD | 散布 | 収穫前日まで | 3回以内 | |
| 15 | マッチ乳剤 | 散布 | 収穫前日まで | 2回以内 | |
| 18 | マトリックフロアブル | 散布 | 収穫7日前まで | 3回以内 | |
| 4 | モスピラン顆粒水溶剤 | 散布 | 収穫前日まで | 3回以内 | |
| 7 | ラノーテープ | 作物体の付近に設置する | 栽培期間中 | 1回 | 野菜類 (施設栽培) |

・殺虫剤 (参考農薬)

| IRAC コード | 薬剤名 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 備考 |
|-------------|-----------|------|--------|------|----|
| 9 | コルト顆粒水和剤 | 散布 | 収穫前日まで | 3回以内 | |
| 23 | モベントフロアブル | 散布 | 収穫前日まで | 3回以内 | |
| UNF | ボタニガードES | 散布 | 発生初期 | - | |

使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注1) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。

注2) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注3) 蚕毒・魚毒については、「34. 野菜類の総括注意」も参照する。

病害虫名 (F: 菌類病、B: 細菌病、V: ウイルス病、O: その他の病原体)

| 病害虫名 | 防除時期 | 防 除 方 法 | 注 意 事 項 |
|--|-------------------|--|--|
| 苗立枯病 (F) | は種前 | 1. 無病の床土、又は焼土を使用する。 2. 発病株は直ちに抜き取る。 3. 床土消毒の項を参照する。薬剤で消毒する場合は、クロルピクリン剤、又はダゾメット剤(ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤)を用いる。 | 1. 灌水は午前中に行い、低温多湿にならないようにする。 |
| 萎凋病 (F) 根腐萎凋病 (F) 半身萎凋病 (F) 褐色根腐病 (F) 青枯病 (B) | は種前及び 定植前 | 1. 土壌消毒の項を参照し、対象病害に登録のある薬剤で消毒する。 2. 萎凋病(レース1、2)、根腐萎凋病、半身萎凋病(レース1)には抵抗性品種、又は抵抗性台木を使った接木苗を用いる。 3. 褐色根腐病には、抵抗性台木を使った接木苗を用いる。 4. 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に埋却する。 5. ナス科作物を連作しない。 6. 排水を良好にする。 | 1. 萎凋病、青枯病は夏期に発生が多い。 2. 接木する際は、刃物を消毒する等してウイルスの感染に注意する。 |
| 疫病 (F) | 5月下旬 ～ 9月中旬 | 1. ICボルドー66Dの50倍液、Zボルドー、ドイツボルドーAの500倍液、ダコニール1000の1,000倍液のいずれかを散布する。 | 1. 6月下旬～7月上旬と8月中旬～9月上旬に多発する。 2. 薬剤は7～10日毎に散布し、降雨の多い時はさらに散布回数を増やす。 |

| 病害虫名 | 防除時期 | 防 除 方 法 | 注 意 事 項 |
|----------------|-------------------|--|--|
| 葉 か び 病 (F) | 5月上旬 ～ 9月中旬 | 1. ベルクート水和剤 6,000 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. ドイツボルドーAの 500 倍液、又はシグナムWDGの 2,000 倍液を散布する。 | 1. 特に、ハウス栽培で発生しやすい。 2. 施設内の通風を図る。 3. 病原菌は主に葉裏に寄生しているため、薬液が葉裏によくかかるよう散布する。 4. ベルクートは、幼果期のメロン、ばらに対して薬害を生ずるので、かからないようにする。 |
| すすかび病 (F) | 5月上旬 ～ 9月中旬 | [参考農薬] 1. シグナムWDGの 2,000 倍液を散布する。 | 1. 特にハウス栽培で発生しやすい。 2. 施設内の通風を図る。 3. 病原菌は主に葉裏に寄生しているため、薬液が葉裏によくかかるよう散布する。 |
| 輪 紋 病 (F) | 5月下旬 ～ 9月中旬 | 1. Zボルドー500 倍液を散布する。 | 1. 発生初期に防除する。 |
| 灰色かび病 (F) | 6月上旬 ～ 9月中旬 | 1. トップジンM水和剤 1,500 倍液を散布する。 2. 施設では、ロブラールくん煙剤によるくん煙法を用いると、施設内の湿度上昇を軽減できる。方法は、「32. くん煙法」を参照する。 [参考農薬] 1. シグナムWDGの 2,000 倍液、又はベルクート水和剤 6,000 倍液を散布する。 | 1. 主に施設栽培の多湿条件下で発生するので、通風を図る。除湿機の利用も有効である。 2. 同一剤は過度に連用しない(耐性菌の出現回避)。 |
| 菌 核 病 (F) | 生育期間 | [参考農薬] 1. シグナムWDGの 2,000 倍液を散布する。 | 1. 主に施設栽培の多湿条件下で発生するので、通風を図る。除湿機の利用も有効である。 |
| うどんこ病 (F) | 生育期間 | [参考農薬] 1. ハーモメイト水溶剤 1,000 倍液、又はシグナムWDGの 2,000 倍液を散布する。 | 1. 肥切れ等により、株が弱ると発生が多くなる。 |
| かいよう病 (B) | は 種 前 | 1. 種子は、55℃の温湯に 25 分間浸漬する。 2. 多発ほでは連作しない。 | 1. 苗床消毒と支柱消毒を合わせて行う。 2. 芽かきは、晴天日に行う。 3. かいよう病はイムノクロマト法により簡易診断できる。 4. 手や刃物に付着した菌により伝染するので注意する。 5. マスタピースは生物農薬である(「34. 野菜類の総括注意」参照)。 |
| | 生育期間 | 1. 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に埋却する。 2. カスガマイシン・銅水和剤(カスミンボルドー、銅水和剤)、クプロシールドの 1,000 倍液、マスタピース水和剤 2,000 倍液のいずれかを散布する。 | |

| 病害虫名 | 防除時期 | 防 除 方 法 | 注 意 事 項 |
|------------------------|----------------|---|--|
| モザイク病 (V) | 定 植 前 (CMV) | 1. CMVワクチン接種苗を用いる。 2. 育苗中は寒冷紗被覆を行うか、幼苗期からアブラムシ類の防除を行う。 | 1. 晩まきなど抑制栽培で発病が多い。 2. CMVワクチン接種苗の効果は、CMVによるモザイク病だけに有効である。このため、現場で発生しているウイルスの種類に注意する。 3. CMVワクチン接種苗は、品種の違いや気象条件によって生育が抑制されたり、軽いモザイク症状が認められる場合もあるので、CMV発生の恐れがない地域では使用しない。 4. CMV感染の有無はイムノクロマト法により簡易診断できる。 |
| | 生 育 期 間 | 1. 周辺雑草などの感染植物を除去し、障壁作物（トウモロコシ、麦等）を栽培する。 2. 発病株は抜き取り、ほ場外に埋却する。 3. ToMVに対しては、抵抗性品種を採用する。 4. 施設では、戸窓に防虫ネット(0.8mm目合い)を張って媒介虫の侵入を防ぐ。 | |
| 黄化えそ病 (TSWV) (V) | 生 育 期 間 | 1. アザミウマ類を防除する。 2. 周辺雑草は伝染源となるので、定期的に除草しほ場衛生に努める。 3. 発病株は抜き取り、ほ場外に埋却する。 4. 施設では、戸窓に防虫ネット(0.4mm目合い)を張って媒介虫の侵入を防ぐ。 | 1. 本ウイルスは、アザミウマ類により伝搬される。 2. TSWV感染の有無は、イムノクロマト法により簡易診断できる。 |
| ネコブ センチュウ | 定 植 前 | 1. 土壌線虫の項を参照する。 | |
| オンシツ コナジラミ | 定 植 時 | 1. ダントツ粒剤を株当たり 1 g 植穴土壌混和する。 | 1. マルハナバチを利用する際は、本剤処理後 20 日目以降に導入する。 |
| | 生 育 期 間 | 1. 黄色粘着トラップを設置して成虫の発生初期を把握し、発生初期に防除する。 2. ベネビアODの 2,000 倍液、又はチェス顆粒水和剤 5,000 倍液を散布する。 3. サンクリスタル乳剤300倍液を虫体に直接かかるように7日間隔で2回散布する。 [参考農薬] 1. モベントフロアブル 2,000 倍液、又はコルト顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。 | 1. ベネビアに関する注意事項 (1) アルカリ性の農薬や肥料との混用は避ける。 (2) 薬害が生じるおそれがあるので、アゾキシストロピンを含む農薬と混用しない。アゾキシストロピンを含む農薬を散布した場合には、散布後2週間以上間隔を空けて本剤を使用する。 2. ベネビアは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 3. サンクリスタルは、高温時には葉に薬害を生じることがあるので、施設では温度管理に十分注意する。また、トリアジン水和剤、スルフェン酸系水和剤、キャプタン水和剤およびストロビルリン系薬剤との同時施用及び近接散布は、薬害を生じるおそれがあるので避ける。 4. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稲にかからないよう注意する。 |

| 病害虫名 | 防除時期 | 防 除 方 法 | 注 意 事 項 |
|---------------|----------------|---|--|
| オンシツ コナジラミ | 生育期間 (施設栽培) | 1. 施設の開口部を防虫ネット (0.4mm 目合い) で被覆する。 2. 黄色粘着トラップを設置して成虫の発生消長を把握し、発生初期に防除する。 3. オンシツツヤコバチ (エンストリップ) をトマト 25 株にマミーカード 1 枚の割合で放飼する。 4. ラノーテープを 10a 当り 30 m ² (幅 5cm×200 m のテープを 3 本分) の割合で設置する。 5. プリファード水和剤 1,000 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. ボタニガード E S の 1,000 倍液を散布する。 | 1. オンシツツヤコバチは殺虫剤に弱いので、利用期間中は殺虫剤の散布を極力避ける。 2. 農薬の散布に当っては天敵に影響の少ない薬剤を使用する (「XVI 資料 1. 農薬の天敵等への影響の目安」参照)。 3. ボタニガード及びびらノーは、蚕毒に特に注意する (特別指導事項参照)。 4. ラノーの使用方法和注意事項については、トマトの項「ラノーテープの使用方法和注意事項」を参照。 5. プリファード、ボタニガードは微生物農薬であり使用方法と注意事項については、「1. 野菜類」のコナジラミ類の項を参照。 6. ボタニガードは 5 回以上の連続散布により、薬害が発生することがあるので注意する。 |
| アブラムシ類 | 定植時 | 1. シルバーストライプフィルムをマルチする。 2. アドマイヤー 1 粒剤を株当り 1～2 g、又はダントツ粒剤を株当り 1 g を植穴土壌混和する。 | 1. ダントツを処理した場合、マルハナバチを利用する際は、本剤処理後 20 日目以降に導入する。 2. オレートは昆虫の気門をふさぎ、窒息させて殺虫するので、虫体に直接かかるように散布する。 3. オレートは高温時の散布は薬害の生じるおそれがあるので避ける。また、アルカリ性剤のため、他の薬剤との混用または近接散布には注意する。 4. ダントツ、モスピランは、蚕毒に特に注意する (特別指導事項参照)。 5. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稻にかからないよう注意する。 |
| | 生育期間 | 1. 施設栽培の場合、開口部を防虫ネット (0.8mm 目合い) で被覆する。 2. モスピラン顆粒水溶剤 2,000 倍液、チェス顆粒水和剤 5,000 倍液のいずれかを散布する。 3. オレート液剤 100 倍液を 5～7 日間隔で 2 回散布する。 [参考農薬] 1. モベントフロアブル 2,000 倍液、又はコルト顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。 | |

| 病害虫名 | 防除時期 | 防 除 方 法 | 注 意 事 項 |
|---------|------|---|---|
| オオタバコガ | 生育期間 | 1. 施設栽培の場合、開口部を防虫ネットで被覆すると、侵入を軽減できる。 2. トアローフロアブルCTの 500 倍液、ゼンターリ顆粒水和剤、プレオフロアブル、マトリックフロアブルの 1,000 倍液、アフアム乳剤、カスケード乳剤、コテツフロアブル、フェニックス顆粒水和剤の 2,000 倍液、ディアナSCの 2,500 倍液のいずれかを散布する。 | 1. オオタバコガの平年の発生時期は5月下旬～10月下旬であり、ミニトマトでは6月上旬及び8月中旬以降に幼虫による食害が認められる。この時期にはフェロモントラップによる成虫の発生活消長を参考にして、薬剤抵抗性発達回避のため系統の異なる薬剤とローテーションしながら散布する。 2. BT生菌剤（ゼンターリ）、IGR剤（マトリック、カスケード、ファルコン）、アフアム、ディアナ、フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 |
| アザミウマ類 | 生育期間 | 1. マッチ乳剤 2,000 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. モベントフロアブル 2,000 倍液を散布する。 | 1. マッチは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 2. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稻にかからないよう注意する。 |
| ハモグリバエ類 | 定植時 | 1. ジノテフラン（アルバリン、スタークル）粒剤、又はダントツ粒剤を株当たり 2 g 植穴土壌混和する。 | 1. ダントツを処理した場合、マルハナバチを利用する際は、本剤処理後 20 日目以降に導入する。 |
| | 生育期間 | 1. プレバソフロアブル5の 2,000 倍液を散布する。 | 1. プレバソンは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 |